具雑煮が生まれたのは、

長崎の郷土料理

島 原半島は、かつてキリスト教が栄えた地として知られている。一五六二年、口之津港が南蛮貿易港として開港した翌年、アルメイダ修道士が布教活動を開始すると、キリスト教は瞬く間に島原半島全体へと広がった。

しかし、江戸幕府による禁教令が発布されると、状況は一変。信徒たちを待っていたのは、凄まじい弾圧であった。さらに圧政、凶作、飢饉などが重なり、耐えかねた島原・天草の人々は決起し、一六三七年、三方を海に囲まれた、まるで要塞のような原城に立て籠もった。これが日本の歴史上、最も大規模な一揆といわれる「島原・天草一揆」だ。

総大将を務めたのはわずか十五歳の天草四郎（益田四郎時貞）。彼に続いて、三万七千人もの人々が原城に立てこもり、八十八日間にわたって戦いを続けた。その間、城の中は統制のとれたコミュニティが存在していたといわれている。さまざまな地域から集まった人々は、地域ごとに、さらに家族単位に分かれ、組織的な籠城生活を送っていたという。

籠城において、最も大切なのは食糧の確保。天草四郎は兵糧として餅を蓄えさせ、持ち寄っていた山や海のさまざまな材料を集めて雑煮を炊き、栄養を取らせたといわれている。

しかし約二十万余の幕府軍の総攻撃を受け、原城は陥落。城は幕府軍によって徹底的に破壊され、すべて埋め尽くされてしまった。一九九二年に行われた原城本丸の発掘調査で発見されたのは、おびただしい数の人骨。そして複数の十字架やメダイ。鉛で出来た十字架は、信徒たちが敵が撃ち込んだ弾を溶かして作ったものといわれている。

原城に立て籠もった際、彼らは祈り、聖歌を歌ったことだろう。そして温かな雑煮を食べ、手を取り合ったことだろう。籠城という苦しい状況から生まれたといわれる具雑煮は今、郷土が誇る味となった。

信徒たちが命を懸けた戦場だった。

原城跡

2018年7月、
「長崎と天草地方の潜伏キリシタン関連遺産」は、
世界文化遺産に登録され、
原城跡はその構成資産となっている。

原城跡に建つ
祈りを捧げる天草四郎の像